2022年12月8日　近未来モビリティ研究会活動

城井信正

生物創造性進化論

「創脳」という創造性に関する本を2022年春に電子書籍化しました。「創脳」を書き上げる中で、創造性と言う脳力は、人だけに限定して語るのは、生物進化上、果たしていいものかという疑問が沸き起こりました。
生物の進化論に関して、ダーウインやラマルクの多々学説がありますが、自分が生物の側からすると何れの学説も進化の各論しか言い当ててないように思い、そうした不納得もあり、進化論について不遜にも新たにゼロベースで考えることにしました。
キリンという種は、キリンいう種になる前の段階で、平地の草が不十分ることに不満に思い、木の高い所に豊かに生い茂る葉を食べたいという欲求が、日に日に増し、その欲求を満たすには、首や脚を延ばすことで体長が大きくなるというイメージを先ずは起想し、そのなりたい自分のイメージ下で高い木の葉を食べようと日々試行し、徐々に骨格等が、そのイメージを具現化すべく長い年月をかけて徐々に変化したと考えられます（イメージがDNAを変えていく）。つまり、なりたい自分のイメージを起想し、その具現化に向けて、日々、試行錯誤、努力するとなりたい自分になれるということが言えます。
植物でも、美しく咲き誇り昆虫をひきつけ受粉させたり、罠を設けて昆虫を捕まえ栄養にしたり（食虫植物）、こ―したいというイメージの下に進化してきました。
創造性とは、「イメージ起想し、そのイメージを具現化する。」と言えます。どの生物も、その種の繁栄を図る手立てとして創造性という脳力を用い進化してきたと言えます。この学説を私は、「生物創造性進化論」と命名しました。
人間が他の生物とは異なる進化を遂げてきたのは、生物が、その個体内で創造性進化を推し進めてきたのに対して、人間は、個体内創造性進化の限界を感じ取り、個体外にその創造性進化に舵を切ることで、能力を様々の方向に展開できることに気づいたからです。人間は、個体外創造性進化で得た創造性という脳力を長い年月をかけ、鍛えることで多くの知と技を生み出し、文明までも創り出しました。創造性という脳力の由来は、正に「生物創造性進化」にあると言えます。人間は、生物学的には霊長類に分類できますが、私的には「個体外創造進化類」と名付けます。
生物がなりたい自分に進化ということは、「自己実現」と言え、人間は、生まれて死ぬまで、自分という存在性を明らかにすべく、「自己実現」に向け努力している分けで、それには生物創造性進化由来の創造性と言う脳力が必要となります。